

平成 24 年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」
プロジェクト型

成果報告書

申請者：梅津紀雄

工学院大学 基礎・教養教育部門 非常勤講師

研究課題名：冷戦と音楽 ソ連の文化政策と作曲家表象

【1. 研究の背景と概要】

冷戦のさなか、米ソを軸とする東西両陣営は、文化・芸術の領域でも戦いの火花を散らしていた。一見意味から自由でイデオロギーとは無縁であるように思われる音楽も、その対象であった。シェーンベルクらの 12 音技法に代表される西側の前衛性は東側では退廃として非難され、ショスタコーヴィチらの調性音楽として現れる東側の保守性は文化統制の象徴として批判の対象であり続けた。こうした、文化とイデオロギー、芸術と政治との関係を考えるための重要な事例を、西側の文献だけでなく、ソ連の文化政策に関する一次史料を包括的に用いて、具体的に解明することを構想し、当研究をその出発点とすることをねらいとした。

この「冷戦と音楽」というテーマは膨大な論点を含み得るものであり、平成 24 年度の 1 年間を研究期間とする当研究では、「ソ連の文化政策と作曲家表象」にその焦点を絞ることとし、具体的にはロシアを出国して死去するまで国外にとどまったストラヴィンスキーと、生涯ソ連邦に住み続けたショスタコーヴィチという二人の作曲家に照準を合わせることにした。社会主義を否定し、「ロシア性」を捨象されて国際的作曲家として受容された代わりにそのロシア的特質の認識が遅れたストラヴィンスキーと、社会主義との観点から語られ受容され続けて、20 世紀の作曲家の一人として公平な目線で検討されず、正当な受容が遅れる結果となったショスタコーヴィチとの対比を鮮明に浮かび上がせるのがねらいであった。

【2. 実施された研究と助成金の使途】

助成金は、アメリカ合衆国及びロシア連邦での文献調査に用いられた。それらの調査旅行は平成 24 年度末（平成 25 年の 2 月と 3 月）に実施された。調査旅行に先立つ期間には、調査旅行の準備にこわえ、1949 年にニューヨークで開かれ、ショスタコーヴィチも参加した、いわゆる「ウォルドーフ平和会議 The Cultural and Scientific Conference for World Peace」の実態分析やストラヴィンスキーの訪ソ（1962）のプロセスなどの分析を行った。

前者はソ連における「ジダーノフ批判」と並んで文化冷戦の始まりの象徴といっても良い出来事であり、後者は音楽界における「雪どけ」のシンボルとも言える事件であった。1948 年にはソ連で音楽の領域にもいわゆるジダーノフ批判が及び、1930 年代よりも熾烈な形式主義批判キャンペーンが行われ、12 音技法を唱導したシェーンベルクや当時はまだ 12 音技法に手を染めていなかったストラヴィンスキーらが十把一絡げに西側の退廃を象徴する作曲家として断罪されていた。しかし、そのストラヴィンスキーはシェーンベルクの死後に 12 音技法を取り入れるようになり、さらにはフルシチョフ時代の 1962 年にはソ連に招かれて自ら指揮をして自作演奏会を開催するに至ったからである（その際、シェーンベルクの作品がプログラムに予定されていたが、ソ連側の要望で省かれるにいたる。このことはストラヴィンスキー側の文献にも記述されていたが、ソ連共産党中央委員会文化部の文書でも確認できる）。いず

れもまだ十分に検討しつくされたとは言い難く、さらなる調査を進めたいと考えているところである。

調査旅行はまず平成 25 年 2 月にアメリカ合衆国で行われ、主としてハーヴァード大学（マサチューセッツ州ケンブリッジ市）のラumont図書館でマイクロ文書の閲覧が行われた。同図書館の地下 Level D の階は各国政府文書のマイクロ・フィルムの保管庫となっており、モスクワの РГАНИ (Российский государственный архив новейшей истории、ロシア国立現代史文書館)にて公開されているソ連邦共産党中央委員会の文書と同じマイクロもそのコレクションに収められている。共産党中央委員会には文化部があり、音楽学者など専門家もスタッフに加わって、音楽界も含めた文学・芸術界の指導・統制を行っていた。その関連文書の一部はモスクワ РОССПЭН 社のシリーズ Аппарат ЦК КПСС и культура として出版されている。梅津は以前に РГАНИ で調査を行ってある程度文書を閲覧しているが、さらなる調査を行うにあたり、今回は作業の効率化を考えてラumont図書館の利用を試みた。モスクワの РГАНИ の閲覧室は大統領府内にあり、ロシアのアーカイヴの中でも利用が面倒なところの一つである一方、ラumont図書館は以下に述べるように、はるかに効率的に閲覧が可能だからである。

参考までに必要な手続きについて触れておくと、所属大学の紹介状を持参して書類に記入し、写真撮影を済ませると、ハーヴァード大学内のすべての図書館を利用できる、3ヶ月間有効の閲覧証 (Visiting Researcher Card) が即座に発行される。ラumont図書館内のマイクロ・フィルムは開架されており、地下 Level B の階の閲覧室へ手続きなしで自由に運ぶことができる。同閲覧室には、スキャン・ソフトがインストールされたパソコンとマイクロ・リーダーが複数設置されており、それらを用いて、必要なページを自由に pdf ファイルにスキャンすることができる。しかも、同図書館は週末や休暇中をのぞいて平日の大部分は 24 時間開館である。こうして、きわめて快適な環境においてソ連共産党中央委員会文化部の文書を閲覧・収集することができた (なお、РГАНИ で公開されている党文化部の文書はフルシチョフ期以降のものであり、スターリン時代にかんしては РГАСПИ での調査が必要である)。

つづいて同年 3 月にはロシア連邦モスクワ市でも調査旅行を行った。モスクワでは、ロシア国立図書館 (いわゆるレーニン図書館) や国立公共歴史図書館において書籍や雑誌の閲覧を行ったほか、РГАЛИ (Российский государственный архив литературы и искусства、ロシア国立文学芸術文書館) で主として作曲家同盟関係の文書閲覧を実施した。ちなみに、РГАЛИ はモスクワ市以外からの閲覧者に事前申請を認めており、紹介状ともに閲覧を希望する文書のデータを送っておけば訪問直後から文書の閲覧を開始することもできる。

調査旅行で得られた文献の分析・検討は現在進められているところであり、消化でき次第、公表していく所存である。幸い、平成 25 年度より 28 年度までの 4 年間、科学研究費補助金を得て、研究を継続できることになった (基盤(C)「米ソ冷戦と音楽 ソ連からの視点」研究課題番号: 25370177)。「冷戦と音楽」という膨大な領域に着手する端緒に当たり、スラブ研究センターより研究助成が得られたことで、幸先良いスタートを切ることができたのではないかと考えているが、それとともに、上記の科学研究費補助金の獲得に当たっても今回の研究助成は有益だったと言えるだろう。この場を借りて、感謝の意を述べさせて頂きたい。